

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02736

研究課題名(和文) 3.11後のESD いのちと暮らしの安全・安心を探究する家庭科の学びの構築

研究課題名(英文) ESD after 3.11 - Building home economics learning that explores safety and security of life and daily life -

研究代表者

大矢 英世(OHYA, Hideyo)

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：50827441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、3.11後の生活課題に焦点を当てて授業検討を行ったものである。時間の経過と共に、被災地から遠い地域では、興味関心も薄れてしまっている。そこで、アクティブラーニングを中心にした授業を構想した。自主避難に関する家族会議、高濃度放射線廃棄物処分場誘致問題の市民会議のシナリオ作りである。授業を通して情報リテラシーを高め、正しく現状を理解することの大切さや、さまざまな視点から熟議する場の必要性への気づきが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、東日本大震災原発事故後の生活課題に焦点をあてた15回の授業を通じた受講生の意識変容について質的分析を行った。その結果、当初は対岸の火事という程度の認識であった受講生も、授業を通して核のごみ問題や3.11後の生活の安全保障の問題は、日本全体で考えていくべき重要課題と認識するまでの変容がみられた。また、報道された文面をそのまま受けとめるのではなく、その裏側にどのような背景があるのかを考えることができるようになっていた。このことから、自分たちで情報にアプローチし、解決策を模索していく授業実践の有効性を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to design lessons which make students think about social issues after 3.11. With the passage of time, interest has waned in areas far from the affected areas. Therefore, we envisioned a class centered on active learning. The class consisted of scenario creation for a family meeting on voluntary evacuation and a citizens' meeting on the issue of attracting a highly radioactive waste disposal site. Through the class, the students were able to enhance their information literacy, and to realize the importance of correctly understanding the current situation and the need for a place to deliberate on the issue from various perspectives.

研究分野：家庭科教育、家政学、初等中等教育、ジェンダー

キーワード：原発事故 いのちと暮らしの安全・安心 ESD 家庭科の授業実践 質的分析 核のごみ 情報リテラシー
— 人権としての安全保障

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日に起きた東日本大震災原発事故後の社会は持続不可能な暮らしの問題を抱えており、この「いのちと暮らしの安全・安心をめぐる課題」を家庭科の中でESDの視点から教材化していくことが必要であると考えた。日本家庭科教育学会の課題研究(2012~2013)で取り組んだ『ESDとしての家庭科教育の可能性と役割』の研究が、その基底にある。

また、2011年10月より家庭科教育に携わる有志で構成された家庭科放射線授業研究会に入会し、授業実践検討を進めて、中高の家庭科で実際に教材として扱い、授業を通じた生徒の変容を肌で感じてきていたことの延長線上にある。震災後の家庭科の授業の中で取り上げた原発事故後の生活課題は、背景となる社会の問題まで視野を広げて考えることを重視してきた。

2018年4月より、宮崎大学に所属となり基礎教育の「現代社会の課題『暮らしを見つめる』」という科目を担当し、「原発事故によるいのちと暮らしの安全をめぐる課題」をテーマに授業を進めていた。しかし、小中高で東日本大震災原発事故の問題を深く考える教育を受けてきた受講生は一人もいなかった。

本研究開始当時はまだ実施されていた教員免許状更新講習では、『ESDとしての家庭科教育の可能性』をテーマとして講師を務めたが、教員にはまだESDという概念が十分浸透しておらず、東日本大震災原発事故に目を向けた授業実践実施者は皆無であった。先の日本家庭科教育学会の課題研究では、家庭科の学習内容とESDは重なる部分が多いことを明示した。しかし、持続可能な生活を送るための本質的問題である「次世代に大きな負担を残すことになった福島第一原発事故の問題を語らずに、持続可能な社会の構築をめざすことなどできないのではないか」という思いが本研究の軸にある。家庭科教育からは、「東日本大震災原発事故によって引き起こされた生活課題について授業で扱いたい、難しく大切な部分は触れられずにいる」という声は多く聞いていた。また、わかりやすい教材を求める要望も多い。ESDとしての家庭科の深い学びを実現していくためにも、これら学校現場からの要望に応えられる研究としていきたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、3.11後のESDとしての家庭科では、特に東日本大震災原発事故による生活課題を中心に上げ、どのようなアプローチができるのか検討し、持続可能な社会の構築にむけて、生活者の人権を守る視点から取り組んでいく学習プログラムおよび教材を提案し、その教育効果を検証することである。しかし、年月の経過とともに、さらに被災地からの距離が遠のけば遠のくほどに、人々の関心は薄れ、風化が進んでいる。いかに自分の問題に引き寄せて考えられるかが要となる。うわべだけの理解、建前論としての思考形成に終始することのないESDとしての深い学びの構築をめざした。

3. 研究の方法

本研究では、主に次の3点に取り組んだ。

(1) 3.11後の先行授業実践の調査および家庭科教育におけるESDの独自性

他教科における東日本大震災原発事故にかかわる授業実践について、学会誌や研究雑誌を中心に先行事例を調査した。特に、原発事故によって生じたいのちと暮らしの安全・安心にかかわる課題を扱った授業実践の抽出を試みた。また、「原子力・エネルギー教育研究会」等の学習会に参加し、3.11後のESDとしての家庭科の独自性を検討した。

(2) 「原発事故によるいのちと暮らしの生活課題」をテーマにした学習プログラムづくり

宮崎大学の基礎教育「現代社会の課題『暮らしを見つめる』」という科目において、「原発事故による15回の授業を構想し、学生の反応を見ながら授業を作り変えていった。

(3) 「原発事故によるいのちと暮らしの生活課題」の授業を通じた学生の意識変更の分析

現代社会の課題『暮らしを見つめる』の授業を通じた学生の意識変容について、授業における記述物や発話記録をもとに、質的分析を行った。分析法には、データをもとに検討した結果、KJ法を用いて分析をした。

4. 研究成果

本研究における主要な成果は次の通りである。

(1) 3.11後の授業実践検討

東日本大震災を機に、家庭科においても特に被災地周辺を中心に、防災、減災、災害食、防災頭巾の製作、避難所運営等災害に備えた暮らしの工夫に関わる授業実践が多く見られ、その中に

は、ESD 実践として報告されたものもあった。しかし、持続可能な生活を送るための本質的問題となる「現在もまだ収束できていない放射能汚染による暮らしの課題」に迫る家庭科授業は、管見の限りでは見当たらなかった。一方、本研究開始前の 2011 年 10 月から家庭科放射線授業研究会のなかで、原発事故後の生活を取り巻く社会背景に視野を広げた実践検討を積み重ねてきていた。その流れの中で、すでに本研究の下地となる授業実践に取り組んできていたのである。食品の放射能汚染による内部被曝の問題に着目した食の安全の授業実践から始めていた。それらの授業実践を積み重ねながら、原発については、複雑な社会背景があり、マスコミ報道では見えてこない現状があることを実感していた。情報リテラシーは、子どもたちだけでなく教師の側こそ高める必要があった。持続可能な暮らしの実現をめざす真の学びの構築には、教材準備にかかる膨大な時間と労力が必要となる。多忙化が進む学校現場でそのような時間を捻出することは難しいのかもしれない。教師の側に、強い動機付けと探究心がなければ、成り立たないであろう。

放射線教育、原発の是非を扱った実践は、社会科・理科を中心に散見された。その中で本研究の授業構想に影響を与えたのは次の 2 つの実践であった。1 つは、高校 1 年生の地理 B で実施した都立高校の生徒たちに原発立地地域から東京を振り返らせる授業（2016、柴田）である。もう 1 つは、茨木健の中高一貫私立学校の中学 3 年生の公民で実施した福島第一原発事故による自主避難をめぐる家族の葛藤を考える授業実践（2017、前嶋）である。

持続可能な社会の構築のためには、3.11 の原発事故によって引き起こされた暮らしの安全・安心への課題の解決が大前提になることは明らかなことである。特に家庭科の独自性としては、経済発展による持続可能な社会の構築というより、身近な一人ひとりの「持続可能な暮らしの構築」を考えることが重要であり、そこに家庭科としての独自性があると考えられる。一人ひとりの持続可能な生活の保障があつてこそ、初めて持続可能な社会の構築がめざせるのである。

(2) 「原発事故によるいのちと暮らしの安全・安心をめぐる生活課題」をテーマとした学習プログラムの作成

2021 年度に担当した現代社会の課題『暮らしを見つめる』の授業で、表 1 に示す内容で 15 回の授業を実施した。

15 回の授業は、主に 2 つのグループワークを中心に進めた。1 つは、「東日本大震災原発事故被災家族の葛藤を通して現代社会の課題を考える」グループワークである。自主避難家族の家族会議のシナリオ作りとプレゼンである。家族構成もグループの裁量に任せた。また、事実に基づき、事故前の居住地をグループごとに設定するようにした。

2 つ目は、「高濃度放射線廃棄物の処分場誘致問題を通して、現代社会の課題を考える」グループワークである。こちらは、受講生の今後の生活圏内で起こる可能性もある事案であり、自分ごととして考えやすいテーマとなっている。

学生の自主的活動を尊重し、こちらからの指示は、できるだけ最小限に留めるようにした。さらにグループワークで深めてほしいことも自分たちで掴みとってくれることを期待し、一度にすべてを説明せず、学生たちの様子を見ながら、足りない部分を補う形でこちらからの説明を加えていくようにした。プレゼンテーションのパワーポイントも、資料の寄せ集めではなく、グループ内での吟味を十分に繰り返した上の発表にしてほしいと伝えた。

(表 1) 15 回の授業内容

回数	授業内容・方法
第1回	オリエンテーション・授業の進め方・事前アンケート
第2回	東日本大震災原発事故についてディスカッション
第3回	原発事故の被災家族を設定し、自主避難に関する家族会議のシナリオ作成
第4回	自主避難に関する家族会議のシナリオ作成
第5回	プレゼン準備 発表スライドの作成
第6回	各回のプレゼンテーション
第7回	自分たちの班への意見や質問を受けて、班ごとの話し合い 次の課題の班替え
第8回	自分事として考える高濃度放射線廃棄物処分場誘致問題
第9回	高濃度放射線廃棄物処分場誘致問題、日本の動向をまとめる
第10回	高濃度放射線廃棄物処分場誘致問題、日本の動向をまとめる
第11回	誘致賛成者、誘致反対者の主張をまとめる
第12回	「核のゴミ問題」のプレゼン準備
第13回	プレゼン
第14回	プレゼン
第15回	まとめ いのちと暮らしの安全・安心への課題

(3) 「原発事故によるいのちと暮らしの安全・安心をめぐる生活課題」の授業を通じた学生の意識変容の質的分析

授業を通じた学生たちの学びと気づきについて、2 つのグループワークでの学生の記述を KJ 法により統合し、図 1 に示した結果図が描き出され、以下のことが明らかとなった。

- ・ 2 つのグループワークを通して、今もなお続いている原発事故後のいのちと暮らしの安全・安心への課題と向き合い、問題意識をもつことができた。
- ・ グループごとに作成した資料はそれぞれに工夫が見られ、内容が重なることもなかった。
- ・ それまで多くの学生がほとんど考えてこなかった被災地の暮らしの問題に初めて触れ、「他人事とするのではなく、共に考え続けていくことが大切」といった気づきがあった。
- ・ マスコミの情報をそのまま受け取っていただけの自分に気づき、情報リテラシーを高めることの必要性について深く考えるようになっていった。
- ・ 核のゴミ問題について検討することを通して、難しい社会課題については熟議を積み重ねてい

く場の設定が必要であることを実感していた。

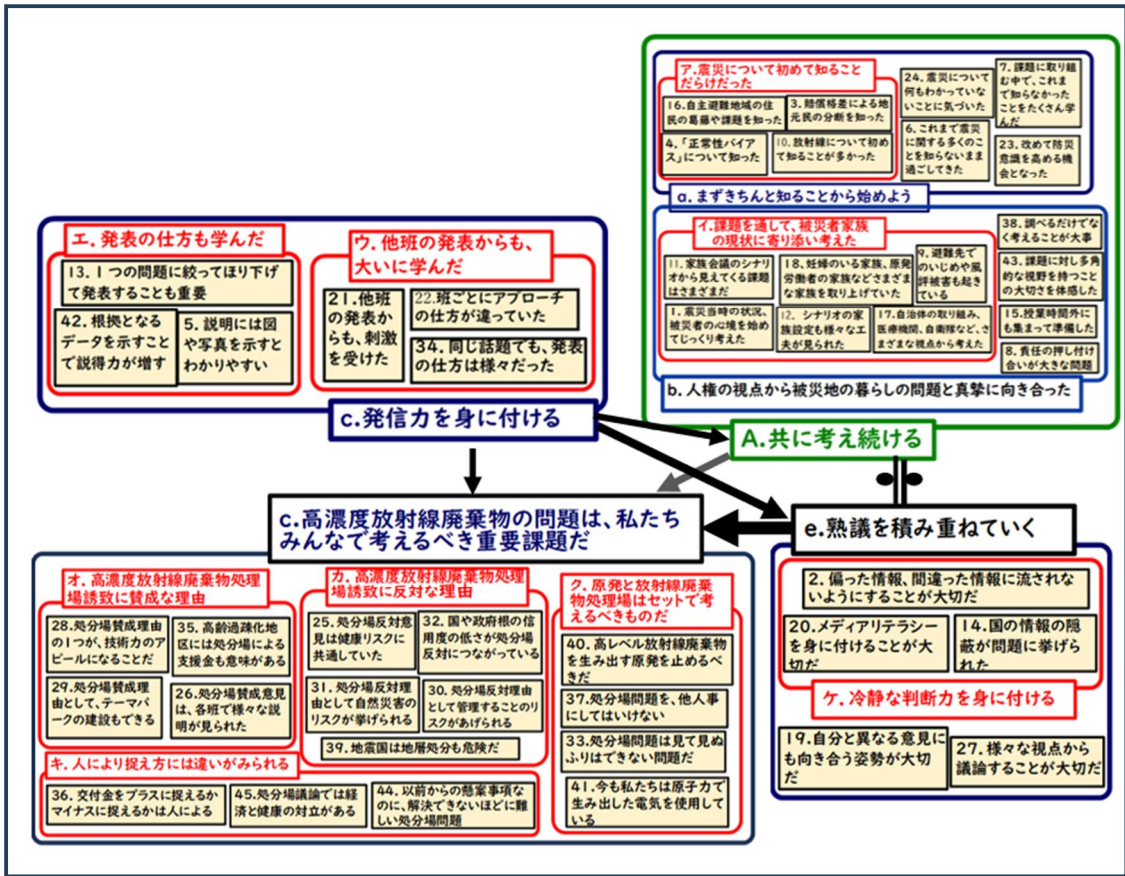


図1 授業を通した学生たちの学びと気づき (KJ法による結果図)

難解な社会課題に多角的にアプローチしていくことにも意欲的に取り組む若者の姿には、未来社会への希望を感じることができた。本実践は、大学入学初年度生を対象にした基礎教育科目の現代社会の課題『暮らしを見つめる』という授業で実践したものである。しかし、高等学校の家庭科の授業においても、十分通用する学習内容になっていると考える。

このようにESDとしての家庭科の授業では、学びを家庭内の工夫に留めるのではなく、家庭生活を取り巻く社会の課題について個人の生活を通して考え、その解決策を探究していくことが重要であり、それこそが家庭科における持続可能な社会の創り手の育成であると考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 23
2. 論文標題 基礎教育「現代社会の課題」における学生の学びと気づき—人権の視点で3.11後の暮らしを見つめる—	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Journal of Engaged Pedagogy 『関係性の教育学』	6. 最初と最後の頁 223 - 236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大矢, 英世, 宮本, 由宇, 今村, 愛実, 鍛冶屋, 茜, 伊波, 富久美, 藤本 明弘	4. 巻 101
2. 論文標題 「かかわる力」「つながる力」を育成する中学校家庭科の授業構想—生徒の内面にせまる高齢者学習をめざして—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 76 - 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 373
2. 論文標題 家庭科の新米先生奮闘記1	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 44 - 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 377
2. 論文標題 語るうつくろう家庭科の授業	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 16 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 378
2. 論文標題 新米先生奮闘記2	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本由宇, 伊波富久美, 今村愛美, 岩見ミカ, 大矢英世	4. 巻 99
2. 論文標題 つながりを意識した中学校家庭科の授業構成と学びー消費生活と衣生活分野の関連を中心にー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 370
2. 論文標題 人権と民主主義の学びを家庭科から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 4 - 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 64
2. 論文標題 家庭科教育とSDGs(6) 家庭科の衣生活学習とSDGs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 86 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世, 宮本由宇, 山口麻衣子, 岩見ミカ, 伊波富久美	4. 巻 97
2. 論文標題 総合的な学習の時間とつながる家庭科の学び - SDGsの視点に立った衣生活学習に関する中学校での授業検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 136-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 1
2. 論文標題 男子進学校における家庭科の定着過程と授業展開 - 男女共同参画の視点を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 博士論文 (日本女子大学大学院人間生活学研究科生活環境学専攻博士後期課程)	6. 最初と最後の頁 1 - 346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 19
2. 論文標題 人権としての生活の安全保障とESD 3.11から家庭科教育は何を課題とすべきか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Engaged Pedagogy 『関係性の教育学』	6. 最初と最後の頁 123 - 136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本由宇, 伊波富久美, 山口麻衣子, 岩見ミカ, 大矢英世	4. 巻 95
2. 論文標題 消費生活分野における小中連携を視点とした授業の構想と実践 - 「商品の選択と購入」に関する中学校での授業検討 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 64 - 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 349
2. 論文標題 今こそ家庭科の原点に立ち戻ろう～『センス・オブ・ワンダー』を大切に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 350
2. 論文標題 家庭科教育と持続可能な社会 きれいごとではすまされない子どもの現状に引き寄せて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大矢英世	4. 巻 352
2. 論文標題 大学1年生が企画した「災害避難所体験」ー地域の方々とつながり、人権の視点で考えるー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家教連家庭科研究	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤裕紀子, 志村結美, 加賀恵子, 大矢英世他	4. 巻 62
2. 論文標題 家庭科教員によるESDの授業実践の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 150-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大矢英世
2. 発表標題 生活を見つめ、主権者として社会に働きかける力を育てる
3. 学会等名 教育研究全国集会2023 第10分科会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大矢英世
2. 発表標題 子どもの思いに寄り添った家庭科の授業
3. 学会等名 教育研究全国集会 第10分科会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大矢英世
2. 発表標題 主権者を育てる家庭科の授業づくり
3. 学会等名 教育研究全国集会 第10分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大矢英世
2. 発表標題 男子進学校における家庭科の定着過程と授業展開－男女共同参画の視点を中心に－
3. 学会等名 日本女子大学大学院人間生活学研究科博士論文口頭発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大矢英世
2. 発表標題 家庭科教育と持続可能な社会
3. 学会等名 第54回家庭科教育研究者連盟夏季研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西川香子, 山本由美, 波岡知朗, 浅井春夫, 大矢英世他58名	4. 発行年 2024年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 300
3. 書名 日本の民主教育 教育研究全国集会2023報告集	

1. 著者名 みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい 教育研究全国集会2022実行委員会（高知）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 日本の民主教育2022	

1. 著者名 鶴田敦子, 大矢英世, 明楽英世, 石津みどり, 板倉幸子他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 143
3. 書名 生活からはじめる教育 コロナ禍が教えてくれたこと	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------